

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成15年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第43巻7月号(通巻528号)

風土

7



行々子

神蔵

器

祭 笛 青 き 畳 を ま ろ び 来 ぬ

死 の 順 の 狂 ひ 大 山 蓮 花 咲 く

妻 の 亡 き て の ひ ら 白 き 立 夏 か な

松 に 時 竹 に 季 あ り 皮 を 脱 ぐ

凜 々 と 尉 の 白 鬚 卯 月 か な

忘られて目高の生きる瀬戸火鉢

蝌蚪に手足生えて玉縄幼稚園

実朝の位牌を秘せり花の寺

しぼりきり仏と分つ新茶かな

眼裏に牡丹ひらきて眠りおつ

おみくじの三度「未吉」風薫る

くからら亡し水面明りに行々子

竹間集

同人作品



山笑ふ

塩田 博久

いつせいに消ゆる街灯朝ざくら
春愁や日ごとに山のふくらめる
S L の残す匂ひや鳥雲に
校正に指先汚す啄木忌
本館三司
観音を頬まで埋めて山笑ふ
観音の重き瞼やつばくらめ
玉福宮家系
木下闇「怨親平等」とのみ白く

くれなゐの筆

柴田 由乃

くれなゐの筆の久しき今朝の夏
女手に十葉の根を引き余す
黒百合や伊吹午より鬱に入る
紫蘭むれ大禍時をあかるうす
うらうらと若葉のこぼす日差しかな
篠笛や和清の天を眩しめり
目こぼしの一幹すでに今年竹

土浦・牛久吟行

高橋 邦夫

朝桜土浦二句霞ヶ浦に白帆立ち
墓参久牛久・御所三句に地下の燈児と春惜しむ
飛花あそぶ芋銭の墓と妻の墓
奪衣婆を見し目にまぶし遅桜
ふりかぶる春の空あり榎大樹
河童碑の河童と戯るる春ごころ
鳥雲に富士を隠せる牛久沼

豆ご飯

南 うみを

千年のけやきを締めて藤の花
揺れてゐる藤から藤へ蜂の屋
きんぼうげ屋根の瓦のぎらぎらす
牡丹のかすかにきしみ開くなり
桐の花田搔の泥に落ちにけり
渋滞の先頭耕転機と早苗
田から田へさざ波走り豆ご飯

枝垂

大竹 淑子

末黒野に停てばむかしの風が吹く
雪嶺をはるかに田水張りにけり
後円の墳の一樹やさへづれる
満開の枝垂に風の重さかな
予後の身を枝垂の影に入るるなり
人声をはるかにしたり紅枝垂
純白の画布をはみ出す枝垂かな

おかめ桜

島谷 征良

啓蟄や何もうごかぬ水の上
心眼のありと信じて蜃気楼
水底も晴をたのしみ蜷の道
朝寝して夢のつづきは見ずじまひ
朱鷺色を濃くせるおかめ桜かな
月斗忌の海おほいなる霞かな
緬羊のこ糸をのどかに山が容れ

遅桜

斉藤 小夜

春あらし竹百幹を自在にす
曇りても晴れても富士や松の花
緑立つ樹冠を風の渡る音
納経の般若心経遅桜
万太郎忌「三田文学」誌抱へ来る
埋め草に書いて卯月の夕景色
無造作に投げ少年の夏帽子

舞 鶴

— 浜 明史 —

蜜柑咲く丘フエリー船入港す
船虫や機関学校護岸跡
自衛艦棧橋狭し燕の巢
ヘリコプターの空に雲なし海開く
内海を取り巻く生活たつき阜月浪
釣人のそびらに並ぶ葱坊主
網かぶる玉葱畑や潮干どき
若布干す筵地べたに西日中
磯濁す女めどき時の波や水眼鏡
棘そよぐ紫海胆や阜月潮

乾きゆく蝮のつぶつぶ忘れ潮
虎魚出て夜撫の磯の賑はへる
夜焚火に少年はこゑ荒らげたる
対岸に船造る火や夏座敷
青めるは銀座の柳移植して
かげろふは八百比丘尼逆さ杉
狂鶯や平忠盛奉行杉
札所への滅罪橋や水涸るる
滝音や蛇切岩に注連張つて
暮れがての磯の煙も芒種かな

山河集

同人作品



神蔵器選

春日傘病院前のバスを待つ
前山の雲剥がれゆく種おろし
真つ白な腰の手拭種おろし
ベビーカー丸ごと入れて春日傘
昼蛙千枚の田の底歩く

代田 青鳥

春風に河童百図のをどりだし
沼音に河童見してふ蘆の角
ゆめいろの童話にも似てたんぼ黄
花吹雪山門入りて脱衣婆
読めぬ字にいつときの恥花杏

内山まり子

おにぎりに花の風くるたなごころ
罎割れし芋銭の絵具皿おぼろ
河童の碑見て来し夜の酒おぼろ

柴田 久子

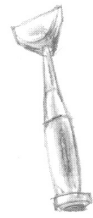
山笑ふ石噛まされて石のがま
かたくりの風分かちあふ筑波嶺

平田紀美子

月を吐く峰や大山蓮華咲く
春送る雨の宇津ノ谷峠かな
峠口筍茹でてゐたりけり
トーストのひとりけり昼餉目借時
母の忌の近くなりけり花馬酔木
オーブンカフェの大学美術館新樹光
夏に入る手帳に記す読了日
朧夜のかねやすに買ふ小物入
親鸞の六字名号風青し
葉桜や国会図書館東口

仙田 孝子

風土独語／神蔵 器



春風に河童百図のをどりだし

内山まり子

雲魚亭での作である。雲魚亭は昭和十二年に草汁庵の前に建てられたアトリエで、現在は小川芋銭の記念館となっている。「河童百図」は記念館で拝見した芋銭の最後の画集である。

大正十四年、平福百穂が西山泊雲宅に滞在した折「わが国の画壇で、どういう人を評価されますか」と尋ねたところ、百穂は「大陸の牛久沼畔に芋銭という人がいますが、この人の絵となら私の絵何枚とでも取り替える」と答えた。泊雲は芋銭に短冊十二枚を送って絵を描いてもらったことから交友が始まった。ということが、雲魚亭案内の中に見え、またこれはある人から聞いた話であるが、近所のファンの人が芋銭に絵を描いてもらい、お代を尋ねたところ、芋銭は「結構ですよ」と代金をとろうとはしなかった。ところが近くにおられた奥さんが「折角ですから三千円ほどいただきます」と言われた。

当時の三千円は大金である。その人は親戚中から借金して支払ったという。家計をあずかる主婦としては無理からぬことで、私は奥さんのことをあれこれ言う気持ちなど毛頭ない。ただ芋銭の手柄がよく出ている話である。

なお、これは当日雲魚亭で、芋銭の生涯を三十分ほどにまとめたビデオセットを視聴しただけであるので、絵の題など間違っ
て記憶しているかも知れないが、深い学識、人生観からついに到達した芸境、南画的な中に日本の風土に密着した「蘆花浅水」から「聴秋」「桃花源」など数多くの風景画のあることに驚き感動した。

河童の碑見て来し夜の酒おぼろ

柴田 久子

同時作である。昼間、大場燈児さん、平本くらら先生のお墓参りをし、得月院に芋銭の墓を拝し、河童の碑から雲魚亭などで時を過し、その夜は霞ヶ浦をのぞむホテルに一泊した。

河童の碑は正面に芋銭筆の河童の座像と、右側に芋銭筆の「誰識古人画龍心」と画賛が刻入されている。画賛の意は「昔は龍を画いて宇宙の尊厳を表したように、私は河童を画いて宇宙太陽系の偉大さに感激し、その不可思議さ大自然の大切さを世に訴えようとしているが、誰かこれを理解してくれる人がいるだろうか」。

その日、夕方から雨になった。ホテルの1と部屋にお酒が持ちこまれ、ごく親しい者同士、うちとけた酒の席となった。夜は次第に更け、霞ヶ浦には漁火一つ見えない。作者の心に去来するものは果して何であつたらうか。「誰識古人画龍心」、酒またおぼろ。

(以下略)

風土集



神蔵 器選

朧夜のからくり箱に鍵しまふ
チユリツップ歎喜の如くひらきけり

東京

遊橋恵美子

喜壽延去

生前に決めし戒名こぶし咲く
勾玉は胎児のかたち夜の朧
花祭心まどかになりみたり
海に日の入りて岬の桜かな

横須賀

平田紀美子

春愁の納経机に般若経
白毫を拝すたんぽぽ地に満ちて
先頭は器先生柿若葉
香時計の香てのひらに四月逝く
つばくちや瓦の先の火伏せ文字
明日ひらく大山蓮華のけはひかな
竹に彫る心経揚羽蝶の舞ふ

東京

林 裕子

受け継がる権三わらぢ昼蛙
一笛のこゑを幻滝ざくら
滝ざくら十余の力柱かな
楽翁の水辺の花の濃かりけり

東京

禅 京子

一と括り立志伝ほか緑立つ
おはなしのハツピーエンド百千鳥
十三時集合すみれの花時計
白蓮や医科歯科大の表門
路味噌や兜造りの太柱
郵便局木工房かね山すみれ
雨だれのスタツカートや花馬酔木
河童の碑のかつば美男や椿咲く
雨匂ふ雨降る前の芦の角
春泥に片足づつのリズムかな
こんにやくのちぎり煮辛し花の宿

東京

柴田 久子

横須賀

下山美江